



第二十卷 第二號

(通卷第七十八號)

昭和十年四月發行

研究

ドイツに於けるギリシヤ愛護主義の運動に就いて

(一八二一—一八二九)

金子光介

緒言

- 一、ギリシヤ獨立運動の本質
  - 二、反ギリシヤ獨立運動の潮流
  - 三、ドイツのギリシヤ愛護主義
  - 四、ギリシヤ愛護主義の開展
- 結論

ドイツに於けるギリシヤ愛護主義の運動に就いて

第二十卷 第二號

三三九

## 緒言

中世一千年間の宗教萬能時代の西ヨーロッパに對立して經濟上世界的に優越なる地歩を占め Hellenismus を繼承して燦然たる光彩を放ち會ては十字軍遠征の人士をして所謂「東方の奢侈」に驚嘆せしめたるギリシヤ帝國の首都 Konstantinopol は、一四五三年五月二十九日オスマン・トルコ Osmanli のスルタン怪雄 Muhammed II. 1451-1481 によりて占領せらるゝの運命に陥つた。爾來 Hagia Sophia の寺塔高く半月旗の翩翩たるを見るに至つた。かくして Athen (一四五六)、Morea 半島 (一四六〇)、Bosnien (一四六八)、Walachei (一四六二—一四六四)、Albanien (一四七九) も相踵いでトルコ人の手に歸した。海上に於ては Venedig 人の頑強なる抵抗ありしに拘らず、一四六三—一四七九年の間に Kandia (Kreta), Korfu 多島海の諸島嶼の多くは皆トルコ人の占領する所となつた。ギリシヤの碩學は多くイタリヤに走り、爾來古代ギリシヤの地はいふまでもなく、中世ギリシヤ帝國の領域は多年にわたるトルコの秕政と苛税とにより、會ては燦然たるヘレニズムの文化は蕩然地を掃ひ經濟的世界活躍は今や見るべきものなく國土は荒廢に歸するものが多かつた。Athen, Korinth, Theben, Patras 等東ローマ帝國時代に隆盛を極めた工業地も今や寒村僻地と化するに至つた。多年幾多の異人種の血を混じ古代ギリシヤ人の純潔さは見るべきものなきにせよ、唯彼等を結合し又最も力

を與へしものは實にギリシヤ正教である。彼等の言語は既に溷濁して古代ギリシヤ語の優美と明朗さとを認ること能はざるも、教會の讚美歌と音樂と聖餐と家族祖祭とに於てその名残を止めて居る。<sup>①</sup>

一八一五年 Wien 條約後は啓蒙主義自由主義革命運動に對する反動史潮がヨーロッパ諸國を支配し、時代は既に反動期に入つたのである。政治上に於ては神聖同盟の活躍となり保守主義の全盛を將來し、思想上に於ては浪漫主義 Romantik, Romanzismus の風潮が一世を風靡した。少くともウィーン會議後一八三〇年七月革命に至る間に保守浪漫主義の一時期を劃することが出来る。

ギリシヤ獨立戰役(一八二一——一八二九)に刺戟せられてヨーロッパ諸國に遽然として起りたるギリシヤ愛護主義 Philhellenismus の熾烈なる運動はこれ正に保守主義の全盛期浪漫主義の收穫期に於ける史的な重要事件といふべきである。この史的な事件を史的潮流より觀て如何に考察すべきや、當時ヨーロッパ諸國に於けるギリシヤ愛護主義の運動には少くとも二個の史的要素が存在する。即ち古代の燦然たる Hellenedom 又は Hellenismus の文化に對する憧憬と宗教的協同觀念 Gefühl der Religions-gemeinschaft とである。

ギリシヤ獨立戰役の劈頭に於て既にヨーロッパの廣範圍にわたりて多大の同情を喚起して居る。この同情は當時のイベリヤ半島イタリヤ半島に進行しつゝあつた革命運動に對する同情もこれに匹敵し得ざるものがあつた。ギリシヤ人が幾多の異種族の血を混入して居るに拘らず、ヨーロッパ一般より

彼等は偉大なる光輝ある古代の Hellenes 直系と目せられたことは彼等の最も大なる利とするところであつた。古代ギリシヤ傳來の豊かなる美術と思想とを認識しこれを憧憬する多數人士は、この古代ギリシヤ人の子孫の獨立運動に對して聲援を惜まなかつた。又この獨立戰役によりてクリスト教徒たる協同觀念が近世に於ては未だ曾て見ざる強烈さを以て動いて居つた。回教徒に對抗してクリスト教の同胞を救ふことは神聖なる宗教的義務であると幾多の人士によりて考へられた。一般ギリシヤ人が一般トルコ人に比して必ずしも善良なるものでなく又道徳的に優れたるものでないことを認めて居る人士と雖、ギリシヤ人が信奉するクリスト教の力によりて將來ヨーロッパ文化の高き地位に飛躍する能力を有する民族であるとの信念を否定することは出来なかつた。これ等のギリシヤ愛護者 Philhellensmen は根柢出發點に於て相違あるにせよ(文化への憧憬と宗教的同情と)、等しく自由と獨立なる語に魅力を感じ、全民族を擧げて憤起しつゝあるこの民族の革命運動に對して從來の保守主義の政策を採りつゝありし政府がこれに干渉を試むるが如きことは結局有害であると思惟するに至つた。<sup>②</sup>

寫實派の詩人 (Gottfried Keller 1819-1890) が彼の作 Gruner Heinrich 1856 に於て「ギリシヤの獨立戰役は全般的に倦怠に對して初めて生氣 (Geister) を喚起せしめ、而してこの自由運動なるものは今や全人類の自由運動なることを想起せしめた」と極言して居る。<sup>③</sup> 史家 Karl Mendelssohn-Bartholdy 1838-1897 が彼の著 Geschichte Griechenlands に於て、ギリシヤ愛護主義の運動を以て「これ一個の大な

る全世界を包含する事業を實現せんとする思慕 *Sehnsucht* を喚起したるものである。即ち十字軍の企圖が世界を通じて起されたのである。ギリシヤ愛護主義は老若を通じての宗教である」と言つて居る<sup>④</sup>。二者各この史的事件の二つの要素を強調したものと観るべきであらう。

註① A. Heisenberg, *Der Philhellenismus einst und jetzt*, S. 1.

② A. Stern, *Geschichte Europas*, Bd. II, S. 475-476.

③ A. Stern, *Bd. II*, S. 476.

G. Keller, *Grüner Heinrich*, Kap. 2.

④ K. Mendelssohn-Bartholdy, *Geschichte Griechenlands*, Bd. I, S. 318-319.

## 一、ギリシヤ獨立運動の本質

一七七〇年ギリシヤ人がトルコに叛した時、彼等の豫期したロシヤの援助を得ることが出來ず叛亂忽ち鎮定されて以來、彼等の獨立心はこれが爲めに決して衰へたものではない。第十九世紀に入りて彼等のトルコの羈絆を脱せんとする民族意識の現れと観るべきものは、一八一〇年 *Bukarest* に於て創設された一文學會研究會が古代ギリシヤ文化愛好者の會合の端緒となり、更に一八一二年アテネに「學藝愛護會」*Philomousoi*, *Hetairie der Philomusen*, *Musenfreunde* が組織された。この會合の目的とするところは全ギリシヤに於て學校の設立、學術雜誌の出版、古代文化の發掘及び維持、アテネの博

物館建設事業、古代ギリシヤ文獻の出版等に要する資金とヨーロッパ各大學に於ける若きギリシヤ人の學徒の學資金との募集である。このヘタイリヤ學藝愛護會は忽ち多數人士の賛意を得て其年を出でずしてアテネとミリヤス *Milias in Thessalien* に於ては古代文化研究を目的とする學園 *Lycceum, Lyceon* が設けられ會員數も忽ちにして八萬を數ふるに至つた。ギリシヤの民族的意識が先づ文化的に目覺めて來たことは注目に値する。<sup>①</sup>

精神的躍進即ち文化的欲求が民族的自覺を強むる上に效果ありしことは明かであるが、更に經濟的素因がこれを誘導したことも見逃すことが出來ない。即ちトルコ人の支配の下にある非回教民族 *Rajah* 殊にギリシヤ人の多數農民が困窮せる状態にあつたことである。これ等多數の農民がトルコの封建的治下にあつて封建的義務を負うて居つた外に彼等は亦回教寺院に隸屬し、これに對して重き負擔をもち又耕作地葡萄栽培地橄欖栽培地に附屬する地面附小作人の域を脱することが出來ない。故に彼等は少くとも、封建領主、回教寺院、地主との三重の十分ノ一税 *Naturalzehnte* を納めなくてはならぬ。彼等農民が往時のギリシヤの盛時を憧憬するに至るは自然の數である。又一面ギリシヤ人にして海岸島嶼に住するものの多くは商業上異常なる活躍をなして居つたことである。元來ギリシヤ人は先天的に商才を有する民族である。近世に於て彼等がトルコに隸屬せるに拘らず商業上大なる活躍を演ずるに至つたことは彼等の天賦の才にもよるが一面ロシアの援助に據るところが多い。即ち一七七四

年七月二十一日ロシヤとトルコとの間に締結せられた Kutschuk-Kainardschi 條約によりてトルコ領内のクリスト教徒は保護せられ(第七條)、又ギリシヤ人の航海者商人の自由なる活躍が保證せられた。かくしてギリシヤ人の住する都市に於ては屢々ロシヤの領事副領事はギリシヤ人を以て任命せられ以てギリシヤ人の權利は保護せられた。故に彼等は各種の特許允許を得又ロシヤの國旗を掲げて通商貿易に活躍した。黒海地中海又ジブラルタルを越えて各地へ盛に往復し、殊にロシヤの穀物は彼等の一手にこれを收めて各地に輸出して居る。その他油類、蜜、絹、農産物等は彼等の重要な商品である。Odessa, Moskau, Astrachan, Triest, Livorno, Konstantinopel に於てはギリシヤ人の商人にして暴富を致すものが少くなかつた。これ等の事實がギリシヤ人の自覺を昂め、又獨立運動に對して多額の資金を提供するものも多かつた。即ち彼等の經濟上の發展が民族的意識を高めたことが多い。<sup>②</sup>

古代ギリシヤ文化の憧憬より開展してこゝに政治上の自由獨立を目的とする結社を生ずることゝなつた。ヘタイリヤ・フィリケ Hetairia Philike, Hetairie der Philiker, der Bund der Befreundeten. と稱するものこれである。この結社の因つて來る動機はウィーン會議に於て正統主義が尊重せられて、トルコ政府が所謂 Rajah に對して全く無關心であつたこと、又古代文化への憧憬、宗教の獨立、多年トルコの秕政に對する人道的意味を有することは勿論であるが、<sup>③</sup>眼目とするところは政治的自由獨立である。一八一四年アテネ及びコルフ島 Korfu を中心として「學藝愛護會員」Philomusen, Musenfreunde

がこの種の自由獨立運動を起し、更に同年オデッサに於て Nikolaus Skufas, Athanasius, Tzakaloff, Panagiotis, A. Anagnostopoulos 等の志士が中心人物となりギリシヤ獨立の祕密結社を組織しこれにヘタイリヤ・フィリケの名稱を附した。この結社は各地の支部と連絡を保ち會長にはロシア皇帝 Alexander I. 1801-1825 の外務大臣にしてギリシヤ人なる Kapodistrias 1776-1831 であつた。彼は一八一九年に會長の職をロシア帝の侍從武官にしてギリシヤ人たる Alexander Ypsilanti 1792-1821 に譲つて居る。一八一九年四月に Kapodistrias が郷里 Korfu 島に歸りこの地にて回想録<sup>④</sup> Denkschrift を公にしこの中に「荏苒沈滞せるヘタイリヤ會がその目的を達成する爲めにはギリシヤ民族の覺醒を必要とする。獨立運動の根柢をなすものは現時活氣を帯びし如く見ゆる民族運動のみに非ずして、廣範圍にわたり生命ある宗教運動である。これ僧侶は國民の救濟者にして教育者であるからである。」と。又ヘタイリヤ會の有力者 Alexander Mavrokordato が一八二〇年九月にイタリヤに隱棲せるワラキヤ Wlachei 侯に與へたる建白書の中にトルコの稅政を詳細に列記し「崩潰の状態にあるトルコは最早や救濟すべきもない。ギリシヤ人の憤起は必然的のものである」と強調して居る。これを要するにヘタイリヤ會の本質は保守主義正統主義時代の潮流に反對せる自由主義民族主義の政治的運動を基礎として宗教的要素を加味したものである。

一八二一年一月に Jannina の大守 Ali Pascha 1822 が叛し、この機に乗じて Ypsilanti はギリシヤ



各地に檄を飛ばし獨立の反旗を「assi」に掲げた。この舉は不成功に終つたが、これが導火線となつて翌年 Morea 半島各地に叛亂大いに擴大した。一八二二年一月十五日に獨立軍が Epidaurios からヨーロッパ諸國のクリスト教國民に宛てた宣言書によれば、「ギリシヤ人が殘忍なるトルコの餌食となることに對して全文明世界の同情に訴へる。人道上よりしてヨーロッパの仁慈を求めルキリスト教の信仰を奪はれたる者は神の玉座に跪ぎて正義を訴へる」と。又一八二二年八月二十二日の Ayios より發したる宣言書の目的は主として Verona の列國會議（一八二二、X、二〇—XX、一四）に對してなされたものであるが、「宗教と人道と正義の爲め」の語を強調して居る。これによるもギリシヤ獨立運動が政治的意義と宗教的意義とを有することが理解される。<sup>⑥</sup>

註⑥ C. Ertler, Der Philhellenismus in Deutschland, S. 6.

Historische Zeitschrift. 16. S. 310 ff.

② Prokesch-Osten, Geschichte des Abfalls der Griechen, Bd. I, S. 5.

A. Stern, Bd. II, S. 191—192.

Kritschuk-Kamarschki 條約の條項に就いては

F. W. Ghillany, Diplomatisches Handbuch, Teil IV, S. 256—257.

③ A. Stern, Bd. II, S. 192—193.

Prokesch-Osten, Bd. I, Einleitung.

④ Prokesch-Osten, Bd. I, S. 12.

ポーツに於けるギリシヤ愛護主義の運動に就いて

⑤ Prokesch-Osten, Bd. I. S. 15-17.

⑥ Werner Büngel, Der Philhellenismus in Deutschland 1821 bis 1829. S. 14-15.

## 二、反ギリシヤ獨立運動の潮流

ギリシヤの獨立運動が文化的政治的宗教的の要素を有するに拘らずヨーロッパの保守主義の政治家は如何にこれを考察したか。彼等はこれを以て純乎たる一個の政治的自由主義の運動であると解したのである。

神聖同盟が成立して保守主義の全盛期を來し、Aachen の五國會議(一八一八、X—X)に於てヨーロッパ協同 European Concert は成立し、Karlsbad のドイツ諸侯會議(一八一九、VII—IX) Troppauer Laibach の列國會議(一八二二、I—V)ありて、何れも Metternich を中心としてヨーロッパ諸國の自由主義民族主義運動の抑壓の機關となつた。これオーストリアは幾多の異民族より成立する寄木細工的國家なるを以て、一度び自由主義民族主義の運動の隆盛を來さんか、オーストリアは土崩瓦解の運命を免るゝことが出來ぬであらう。一八二二年のイスバニヤ革命運動鎮壓の目的を以て Verona の列國會議(一八二二、X、二〇—XX、一四)が開催せられ、ギリシヤ假政府の使節 Andreas Metaxa 伯がギリシヤ獨立の後援を依頼し、所謂「君主會議に活躍せるクリスト教的的人道正義の諸君主は、ギリシヤ假政府

の正當なる要求を承諾されんことを切望<sup>①</sup>したに拘らず(一八二二、VIII二九)、會議はこれを以て「僭越にして拙劣」として拒否して居る。又一八二二年十一月十四日附にて會議の諸君主使節への廻章 *Niederdeposche* (*Osterreichischer Beobachter*, 1822, Nr. 5 に於て公表せられたるもの)に對して列國の君主使節はギリシヤ獨立運動を以て、イタリヤ及びイスバニヤの革命と同一視して居る。

「メッテルニヒの最も懼るゝものは實に革命であつた。革命は彼に取りては疫癘 *Pest* であり、火難であり、化膿せる腫物であり、ヨーロッパの平和と秩序とを灰燼に歸しこれを壊滅荒廢せしむる噴火山である。」<sup>②</sup>「東方に於て三十萬乃至四十萬のギリシヤ人が殺戮さるゝもメッテルニヒには何等の痛痒を感ぜなかつた。彼はギリシヤ人を非難しこれに同情するものを嘲笑する目的を以て彼の最も信賴せる祕書官顧問たる *Friedrich von Gentz* 1764-1832 の經營するウイーンの *Osterreichischer Beobachter* を利用した。ゲンツはこの紙上に於て全力を擧げてギリシヤ人を非難して「墮地獄の民族」*eine infernale Rasse* と罵り、又トルコ駐劄オーストリア大使 *von Ottenfels* がギリシヤ人を呼んで憐むべき狼籍者 (*elende Hollunken*) と呼びたることに大いに賛意を表して居る。」<sup>③</sup>殊にゲンツがギリシヤ革命に對する極めて卒直なる反駁の一例は一八二二年七月十三日の *Osterreichischer Beobachter* の紙上に於てこれを見ることが出来る。<sup>④</sup>曰く「吾人は意見を發表するに當り、徒に義務的に中庸謙讓なる態度を執るが如きことは爲さぬ。實に吾人は事件に對して未熟なる批判をなすことを處れ眞の人類愛から出發

せないことを憂ふるからである。吾人は久しく沈黙を續けて居つたが、十二箇月以來 Österreichischer Beobachter に對して浴びせたる幾多の譏誣中傷に對して最早黙することが出来ない。彼等はこのギリシヤ問題を以てギリシヤの爲めヨーロッパの爲め人類の爲め最も重大なる問題となし、吾人はこれを弛緩せる常套語と自ら盡きたる一方的空想とを以て論じ去るものであるとなし、又吾人が不徳罪惡を犯すものであるとして攻撃して居る。吾人はかゝる事件に對して吾人と同一の所信者の多く出でざることを遺憾とするものである。吾人の確信は牢乎として抜く可からざるものがある。即ちギリシヤの眞の利益は彼等の所謂不悞戴天の敵たるトルコ人によりて毀損せらるゝものではなく又妨害せらるゝものでない。否寧ろ多數のギリシヤ愛護者の時勢に適應せざる無理解なる感情的措置や言動によるものである」と。

メッテルニヒがギリシヤの獨立運動に反對した理由としては、彼の保守主義の立脚地以外に更に左の理由を擧ぐる事が出来る。<sup>⑤</sup> ロシヤがギリシヤ民族擁護を口實としてバルカン方面に進出することを虞れたこと、オーストリアとトルコとはナポレオン戦役以來約三十年間友交關係にあつたこと、オーストリア人がトルコ方面に於て經濟上ギリシヤ人と競争對立の關係にあり將來のギリシヤ人の發展を喜ばなかつたことである。殊にこの經濟的對理由としては、一八二一年中に Österreichischer Beobachter 紙上に「トルコ軍がギリシヤに入りてより秩序と安寧とは恢復せられた。曩にギリシヤに

はヘタイリヤ黨員が入つて殺人強盜掠奪不安を敢てした一とのギリシヤ人の無秩序を非難する報道が掲げられたこと、又ゲンツが一八二二年中に同紙上に於てギリシヤ問題に關してドイツの諸新聞紙に對し訓戒をなし一新聞紙を模範的のものとして推奨して居る。一新聞紙とは *Spectateur Oriental* 紙である。この新聞紙は *Smyrna* に於て發行せられたものであつてスミルナのフランス領事の祕書官たるフランス人 *Raffeneil* の主宰するものである。この新聞紙の論調はトルコ人と親善關係を保ちギリシヤ人を敵視したものである。この新聞紙がかゝる態度を執つた理由は明である。即ちトルコ方面の擾亂によつて近東方面の外國人の通商關係の破滅することを恐れたからである。殊にスミルナ地方が流血の巷と化することを最も虞れたからである。この事實は彼が必ずしもギリシヤ人そのものに惡感を懷いて居らなかつたことを *Histoire des évènements de la Grèce, 1822* に於て辯明して居る。<sup>(7)</sup> ドイツに於けるギリシヤ愛護主義の運動に經濟上の理由で反對した新聞紙に *Frankfurter Blätter* がある。これ *Frankfurt am Main* に於ける株式取引者の所説を掲げたものである。彼等は東方の叛亂が引いて有價證券の暴落を來さんことを恐れたからである。彼等は一八二一年中に「ギリシヤ人の反トルコ態度を以てコンスタンティノープルに於けるユダヤ人對ギリシヤ人の經濟的成立」に歸して居る。<sup>(8)</sup>

ギリシヤの獨立運動とドイツに於けるギリシヤ愛護主義に反對せるものにして神聖同盟擁護の保守的政治論としては、無名氏の小論文の一小冊子に、 *Griechenland und europäische Politik, 1822,*

Göttingen. がある。神聖同盟の立場を辯護した煽動的文章である。<sup>⑨</sup> 同じく無名氏の *Napoleon und Londonderry, ein Gespräch im Reiche der Toten* 1823 に於て神聖同盟のギリシヤ獨立運動への干渉の理あること及びヘタイリヤ會を攻撃して居る。<sup>⑩</sup> *A. A. Zeitung*, 1824. Beilage No. 186. の論説 *Vom Main* も神聖同盟の立場を擁護したものである。

一八二一年以來ドイツを中心としてギリシヤに向つたギリシヤ愛護主義者のギリシヤ遠征軍の失敗がギリシヤ獨立運動に對する反感を激發し、同時にギリシヤ愛護主義を嘲笑する傾向を示した。「故國の自由主義と革命とに失敗せる人士又熱烈なる青年がギリシヤに赴いた。フランスの *Fabvier*, *Callergno*, *Santa Rosa* 等は單純なる政治的亡命者ではなくして、西方に於て彼等の事業に失敗したる後、東方に於て自由主義の活路を見出すことが出来ると思惟したからである。實にギリシヤ獨立戦は各國民から逐放者と慷慨家とを誘致したのである。 *Almeida* 伯がポルトガルから逃れ來り、 *Rossario* 將軍はシチリヤ島の炭燒黨 *Carbonari* にして死刑を宣告せられたものであるが今やギリシヤに亡命して來た。ポーランドの再興を熱望せる多數のポーランド人もギリシヤに來りて彼等の血を沸した。 *Peta* の戦(一八二五、*VII* 二二)で戦死した *Mizewski* の如きこれである。 *Dennigogen* に對する急激なる壓迫を厭ひたる多數のドイツ人の軍人學生自由主義者もこれに赴いた。例へば熱血男兒 *Franz Lieber* 1800-1872 の如きもギリシヤに於て活氣ある活躍の地を得たと確信した。然れども *Lieber* の如き戦

闘力を有するギリシヤ愛護主義者も忽ち自己の期待を裏切られたことが明かとなつた。彼等は古代の Aristides, Epaminondas の如き高潔なる志士の遺志が深くギリシヤ人の腦裏に浸潤せるものであるとの大なる期待を有したるに拘らず、彼等はしばしばギリシヤ人の盜賊掬摸に出會ふことがあり、又ギリシヤ人の未開なる麤野と卑劣と無節操なことが、理想に富み古代的風格を備ふるギリシヤ愛護主義者とは實に明確なる對立をなして居つた。過多なる辛苦と窮乏とは多數の生氣ある志士の熱情を冷却せしめ又大膽にして強き意志を有する是等の志士さへもギリシヤ人の無慈悲なる忘恩と陰險なる不信とを責むるものが尠くなかつた。然し亦公平なるギリシヤ愛護主義者は彼等自身の間にも幾多の缺陷あることを自認して居る。即ち放逸にして冒險的生活に興味をもつ多數の不評のヨーロッパ人が彼等の旗下に集つて來たことである。これ等の者は異邦人たるギリシヤ人の風習を輕視し、加之飲酒と情欲と放縱との無節操なる行爲を敢てした。かゝる事情よりしてギリシヤ遠征の士の間には幾多の不滿があつたことは驚くべきものがある。<sup>①</sup>故にこれ等の志士の中幾多の不快なる感を懷いて歸國したものが多し、又かゝる遠征軍が多く失敗に了つたことも事實である。 Franz Lieber の Tagebuch meines Aufenthalts in Griechenland. 1823 は彼が事、志と違ひ失望の極、這般の消息を明かにしたものである。宗敎家 E. F. C. Wiegand の二著 Rechte Griechenlieder für Griechen und Deutsche, zur Verständigung Aller, 1823 及び Die Ritterfahrt ins Klassische Griechenland, 1823 に於てギリシヤ人が正統君主た

るトルコに反抗することを以て神を冒瀆するものとなし、ギリシヤ遠征の擧に對し痛烈なる嘲笑を浴せて居る。<sup>⑩</sup>

文人社會の間にも反對の風潮の現はれて居るものがある。詩人 F. T. A. Hoffmann 1776-1822 及び Heinrich Stegitz 1801-1848 のギリシヤ人を歌つた詩中に明にギリシヤ愛護者殊バイエルの王子 Ludwig を嘲笑揶揄したものがあり、K. H. Lang 1764-1835 の戯詩 Hamelburger Reise, 8 Fahrt oder meine Begebenheiten am Hofe des Fürsten Ypsilandi in Griechenland. 1826 もこの種の屬するものである。<sup>⑪</sup>

⑩ Prokesh-Osten, Bd. III, S. 449-450. (Aus Monarques Chrétiens réunis à Verone)

Werner Büngel, S. 16.

⑪ C. Erler, S. 7.

⑫ C. Bulle, Geschichte der neuesten Zeit, B. I, S. 96.

C. Erler, S. 7.

⑬ C. Erler, S. 10-II.

⑭ H. v. Treitschke, Deutsche Geschichte im XIX Jahrhundert, Bd. III, S. 189.

C. Erler, S. 12.

⑮ Augsburger Allgemeine Zeitung, 1821, Nr. 163. (Erler, S. 10).

⑯ C. Erler, S. 9.

⑰ A. A. Ztg. 1821, Nr. 215. (Erler, S. 17).



- ⑨ C. Erler, S. 17.
- ⑩ R. Arnold, S. 97. Erler, S. 14.
- ⑪ A. Stern, B. II. S. 477.
- ⑫ Arnold, S. 106. Erler, S. 14-15.
- ⑬ Arnold, S. 161. Erler, S. 15.

### 三、ドイツのギリシヤ愛護主義

ギリシヤの自由運動に對する保守主義者浪漫主義者より又經濟的理由よりして幾多の反對があり、又ギリシヤ獨立戰役の目撃者が齋らす明暗兩面の報告があつたに拘らず、ヨーロッパ諸國人の間に同情心が油然而として喚起されたことは事實である。殊にかくの如き方面に進出發展する名譽はドイツが最も適して居る。Reuchlin, Melancthon, Lessing, Winckelmann, Goethe, Schiller 等幾多のギリシヤ古典藝術の愛敬者を輩出したるドイツに於てはギリシヤ再生の思想を鼓吹すべき多くの内的衝動を有する有識者をもつた。ギリシヤ自由戰役十年前、既に樂人 J. Beethoven が喜劇作者 A. Kotzebue 1761-1819 の作 *Ruinen von Athen* に寄せた莊重明快なる古典趣味の樂譜が一般人心に異常なる感動を與へたことも事實である。<sup>①</sup>

Bayern 王 Maximilian I. 1756-1825 の太子 Ludwig 1786-1868 (後の Ludwig I. 1825-1848) 等、

ドイツに於けるギリシヤ愛護主義の運動に就いて

J. J. Winckelmann 1717-1768 の思想的影響を大いに受け Griechentum の愛好者である。彼は曾て自らイタリアに旅行して親しく古典藝術に接してギリシヤ文化に對する大なる憧憬を持ち古代ギリシヤ人の偉大なることに對して大なる感激と熱情とを禁ずることが出来なかつた。故に太子の心は行住座臥 Marathon, Salamis の英雄の如く戦ひつゝあるギリシヤ民族の上に彷徨したのである。太子の作詩二十篇以上は實にギリシヤ人の自由運動に關するものであつた。故にドイツに於けるギリシヤ愛護主義の運動は先づバイエルンの朝廷より起つたものである。München の教授文獻學者 Friedrich Thiersch 1784-1860 (Preceptor Bavariae, Lehrer oder Unterweiser von Bayern) はドイツ學者中の最も熱心なるギリシヤ愛護主義者の一人である。彼は曾て一八一三年パリに於て當時の碩學 hellenistische Adantios Coray 1748-1833 に接して左の言を聴き深く感銘したものである。曰く「一個の運動はギリシヤ民族を驅りて一定の目的に向つて邁進しつゝある。而して何人の力と雖これを阻止することが出来るものでない」と。彼 (Thiersch) は又實に München に於ける Athenäum の指導者であつた。アテネノウムはミュンヘン在住の若きギリシヤ人の學徒の爲めに設けられたる學校である。彼はギリシヤ自由戦役以來(一八二一年) Augsburg Allgemeine Zeitung に書を寄せてギリシヤ事件に對して頻にこれを擁護して居る。就中最も著名なる論文に Von der Isar 1821. VI. 2 がある。彼は倦むことなく Gentz が Österreichischer Beobachtung 紙上に公にせる反ギリシヤ事件の論説に應酬した。彼

は事件前より既に太子と共にヘタイリヤの指輪 *der Ring der Hetarie* を身に帯び、一八二二年にはギリシヤ救援軍の必要と計畫を説いて居る。彼は政治上に於てはロシヤの對ギリシヤ干涉を論じたことがあるが、本來は純然たる Humanist の態度を以て終始したものである。<sup>②</sup>

當時民間に於て最も有力なる新聞紙の一は *Angsburger Allgemeine Zeitung* であつた。この新聞紙は初めより必ずしも自由主義を標榜したのではないがギリシヤ愛護主義に關する論文を最も多く掲載した。この新聞紙の經營者は *Cotta von Cottendorf* 1764-1832 であつて、この人は相當熱心なるギリシヤ愛護者であつた。彼はメッテルニヒやゲンツとも私交はあつたに拘らず紙上にギリシヤ事件を紹介して世人の同情を求め又屢々 *Württemberg* 王 (*Fr. Wilhelm I.* 1816-1864) にも紹介し又彼自ら王に講演して居る。<sup>③</sup> この新聞紙がミュンヘンを中心とするギリシヤ愛護主義の思想傳播に貢献したことが多し。

ミュンヘンがドイツのギリシヤ愛護運動の先驅となり中心となり、而してこれが機關たる「ミュンヘンのギリシヤ愛護會」*Münchener Philhellenische Verein* の指導者として *Fr. Thiersch* 教授と共に活躍した者に古典建築家として有名な *Leo von Klenze* 1784-1864 がある。この會には教授教師學生官吏軍人勞働者而してクリスト教各派の僧侶の多數もこれに加入して居た。一八二七年末までにバイエルン國王 (*Maximilian I., Ludwig I.*) の寄附金以外に 150,000 フランの資金が寄贈せられ、又

この頃ギリシヤ教會員 Die Griechische Gemeinde が國王の指導の下に成立しミュンヘン市のサルツァドル教會 Salvatorkirche がこれに充てられた<sup>④</sup>。尙 Thiersch 教授が中心となりミュンヘンのギリシヤ愛護會が一八二一年初めに A. A. Zeitung 紙上に發表したギリシヤ擁護の十字軍の企圖が幾多の志士の血を沸し、又自由戰役時代の老勇士 (E. L. v. Dahlberg 1773-1833 の如き) の奮起を促したるが如き、又愛護會の行つたギリシヤ援助の軍資金や救濟金の募集の如き、ドイツ各地に相ついで起つた。この種の擁護會のギリシヤ遠征軍の企圖や資金募集事業の先驅をなしたものである<sup>⑤</sup>。

急速に發展しつつあるこのギリシヤ愛護主義の運動に對してウィーン政府のメッテルニヒが峻烈なる壓迫手段を採つたことは自由主義に對する保守主義の潮流と觀るべきである。メッテルニヒはギリシヤ愛護運動を以て革命運動と目し就中 Thiersch 教授の行爲はドイツ多數の識者を誘惑する狂氣の沙汰であると思惟した。彼は一八二一年末にバイエルン政府及び Württemberg 政府に對し、プロシヤ政府と協同して峻嚴なる警告を發して居る。これより曩に一八二一年九月にメッテルニヒがプロシヤ政府とギリシヤ愛護主義抑壓の協同政策を採るために、プロシヤの外務大臣ベルンストルフ伯 Christian Rüner, Graf von Bernstorff. 1769-1835 に與たる覺書中に「ギリシヤ愛護主義に對するバイエルン政府の弱腰と Württemberg 政府の曖昧なる態度とは、これに對してプロシヤとオーストリアの兩國をして強硬なる態度を執るの必要に迫らしめた。これ Thiersch 教授及びその一味の革命的遊戯 das re-

volutionäre Spiel を終熄せしむる爲めである。かゝる革命遊戯こそ罪惡を犯すに至らざれば最も笑ふべきことである」と、以てメッラルニヒの心境を察することが出来る。<sup>⑥</sup>これが爲めに Thiersch 教授は Bayern 政府の警告をうけたが、太子ルードウィヒは彼を以て「自由の使徒」Apostel der Freiheit として陰にこれを保護し、依然としてギリシヤ愛護運動を繼續した。同様の壓迫は殆ど同時にベルリンの盲學校長の Zeune 1778-1853 を中心とするこの種の運動にも及び、又哲人 Krug の發したるこの種の檄文の印刷物も各地で押收された。

哲學者にして神學者なる Leipzig 大學の教授 W. Traugott Krug 1770-1840 は Thiersch 教授と相並びてドイツの人心に最もギリシヤ愛護主義の思想を普及せしめた一人である。彼の一八二二年五月一日に公にせる小冊子 Griechenlands Wiedergeburt, ein Programm zum Auferstehungsfest von Wihl. Traugott Krug はこの種のギリシヤ愛護主義の出版物の先驅をなすものであつて、彼はこの書に於てドイツ各地に「ギリシヤ擁護會」Hilfsverein für die Griechen の設立を慫慂したことは最も注目し價する。又この書の序文に曰く「復活祭なるものは吾人自身が暗黒より光明へ、屈從より自由に向しするのみならず他の者もかくあるべきことを祝する爲めである」と。彼は復活祭を記念すべく、この書をギリシヤ愛護主義の友人、又曾て彼の聽講者であつたギリシヤ人 D. Kumas in Smyrna, Manassis aus Thessalien, Mauros von der Insel Paros 等に寄贈しギリシヤへの同情を示し、本文に於ては彼は

専らギリシヤの立場を辯護し、神聖同盟正統主義に論及して、「トルコは決してギリシヤの正統なる支配者ではない。何となればギリシヤ人は從來決してトルコと屈辱的條約を締結したことはない。ギリシヤに對してトルコ政府の行へるものは篡奪的支配 eine usurpierte Herrschaft である。故にギリシヤの自由戦役は君主に對する叛亂を意味するものではない」と論じ、更にヨーロッパの五大國の執るべき態度を提議して曰く、「オーストリアとロシアの兩國は獨立戰に干涉することを欲せざる旨を全ヨーロッパに向つて正々堂々と宣言すべきである。プロシヤも從來の沈黙を破つて同様の宣言をなすべきである。フランスはルイ十四世以來しばらくトルコと提携して來たが、今やトルコをしてギリシヤと戦はしめざる様努力せなくてはならぬ。イギリスも諸國と同様中立を保たなければならぬ」と。而して卷末に於てギリシヤ人の成功を祈りて曰く、「余は既に半月旗が旭紅 Morgentrot の前に震駭し、コンスタンティノーブルの尖閣 Zinnen 上にその色を失ひつゝありと想像して居る。余の見る所では、一度び汚されたる St. Sophia Kirche の門戸は開かれて、高く掲げたる十字架を持つ勝利者として吾人を迎へつゝある。アテネの牙城の門 Propyläen は新に光輝を放ちて高く聳え、而してアテネの Piräeus 港は世界各地よりする船舶輻湊すべく、又知識欲に飢ゑたる青年等は Akademie の木蔭の道に、又 Stoa の講堂に蝟集するであらう。彼等の欲する所は、實に能辯なる教官の口より知識の言葉を聴き又新しき讚美歌を聞く爲めである。Zeus や Pallas (≡ Minerva) の諸神を讚ふる爲めに非ずして、實にクリ

スト教の永劫の神を讃へんが爲めである、クリスト教の神は、光を作り人類に自由を與へ奴隷の國をして樂園となし又死者をして新しきよりよき生命に蘇すことを欲するものである」と。彼の説く所、保守主義者流の正統主義論に反對せるも、而もギリシヤの自由運動に對する同情に多分のクリスト教的浪漫主義的思潮を認める。これ轉換期に於ける史潮の交流と觀るべきであるが、彼が第二書 *An meine deutschen Mitbürger, 1821 VIII, 1* に於て十字軍の必要を強調するに及び、彼の説は多數の歡迎をうけ、前著書は版を重ねる三、ドイツの輿論は彼の希望に傾き來つたことは事實である。<sup>⑦</sup>

Krug 教授の第一の小冊子が公にされたと殆ど同時に、坊間に於て好評を博した無名氏の小冊子に *Die Sache der Griechen, die Sache Europas* がある。「トルコとギリシヤとの關係は數百年來の不潔なるものであつて條約に準據せるものではない。ギリシヤの自由運動はアメリカがイギリスから獨立したのと同意義のものである。ギリシヤを援助することは合理的頭腦を有するものゝ義務である。これが爲めに先づ金圓と軍需品とをギリシヤに送るべきである」と論じて居る。この書は一八二一年中に *A. A. Zeitung* の附録 (*Beilage, No. 106*) として公にされたものであるが、後にライプチヒの神學教授 Thugschiner の著であることが明となつた。宗教上の同情から來たものと觀るべきである。<sup>⑧</sup>

*A. A. Zeitung* と共にギリシヤの獨立運動に同情的態度を示した新聞紙は *Mainzer Zeitung* である。同紙の主筆 *Friedrich Lehne* 十 1836 はマインツがフランスであつた時代 (一七九九—一八一四) に

マインツ大學の教授にして圖書館長たりし人であつた。彼のギリシヤに對する同情論は彼の全集中にこれを發見するが、これ彼が一八二一年中に數々 *Mainzer Zeitung* 紙上に發表したものである。彼の説はトルコを以て掠奪者と呼び、ギリシヤの自衛權を説きクリスト教的人道主義に論據を置いて居る、人道的宗教的のものである。この新聞紙にはその他の多くのギリシヤ愛護の論文が登載せられた。<sup>⑨</sup>その他 Stuttgart 市の *Morgenblatt für Herrlin* 市の *Gesellschafter-Zeitung*、Dresden 市の *Abendzeitung* 紙の如き熱烈なるギリシヤ愛護主義の態度を示して居た。

古典家 Karl Otfried Müller 1798-1840 は古代ギリシヤ文化の研究よりして近代ギリシヤへの熱烈なる憧憬を持つに至つた一人である。彼は *Geschichte hellenischer Stämme und Städte*, 1820-1824 を公にして古代ギリシヤへの思慕を示し、遂に彼はアテネに居をとし一八四〇年この地を以て彼の終焉の地となし、アテネ市の西北三軒の *Sophokles* の生地として名高い *Kolonos* 丘上に永へに眠つて居る。<sup>⑩</sup>

文藝方面に於てもギリシヤ文化への憧憬の思想を昂めたものが多い。浪漫主義の詩人 Jean Paul (Friedrich Richter) 1763-1825 は *Geschichte einer griechischen Mutter* 1822 に空想的表現をなす。女詩人の *Amalie von Helvig-Imhof* 1776-1831 と *Luise Brachmann* 1777-1822 が Schiller & Körner の *Pathos* に倣ひてギリシヤ愛護主義の詩を創め、同じく浪漫主義の詩人 Wilhelm Müller 1774-1827



が前二者と相並んで獨創の天才を以て *Lieder der Griechen*, 5 Hefte, 1821-24 及び *Neugriechische Volkslieder*, 2 Bde, 1825 に於てギリシヤ獨立戦役に對する同情を示し、殊に Müller の詩は人心に大なる影響を與へて居る。ドイツ人間に於ては彼の詩はギリシヤ愛護主義に缺く可からざる一大勢力となつた。ギリシヤの英雄 *Ypsilanti* はドイツの青年讀本學校教科書に於て Müller の詩 *Griechenfürst Ypsilanti* に不朽の花を咲かせ、又青年子女は彼の詩 *Keine Hydrinen* (タルコに反抗せる) を讀みて神と祖國との爲めに犠牲となつた物語に熱情を沸かし、*Maini* (Mini) 地方の婦人の運命を羨望した。老も若も共にこれ等の詩句を反復したものである。就中この詩は F. Schubert の作曲によりて不朽の生命を保つて居る。<sup>⑩</sup>

ギリシヤの民謡が大いに流行したことも人心の傾向を察することが出来る。最も著名なるは *Klepten* (*Räuber, Kléptés*) の詩である。これ既に第十八世紀後半に於て J. G. Herder 1744-1803 がこれが解釋を試みたものである。この詩はギリシヤの北部中部の山間地方に於て歌はれたものであつて、トルコ人に對する無限の恨を含めたものであり、祖國の自由に對する切實なる思慕の調が明快に表はれて居る。<sup>⑪</sup>ゲーテは近代ギリシヤの民衆文學に大いに共鳴を感じ *Werner von Haxthausen* 1823 に於てこれが多くの翻譯を公にした。この中に *Charos* (*Todesgott*) の莊重なる詩があり老若男女を力強く引きつけたものである。これが爲めにゲーテは期せずしてギリシヤ愛護主義者と呼ばるゝに至つ

た。然し彼の Helias に對する憧憬は彼のイタリヤ旅行以後であらう。彼がファウストの中に熱血詩人 Byron の爲めに不朽の記念塔を建設したのもこれが爲めである。<sup>⑭</sup>

理想派浪漫派の詩人にしてギリシヤ憧憬の思想を發表したものが甚だ多い。Uhland, Stieglitz, Tieck, Fouqué, Chamisso 等何れもこの傾向を示して居る。ギリシヤ文化憧憬を目的として一八二六年 M. G. Saphir 1795-1858 (Humanist にしつて Satirist なり) がヘルリンに於て發行せる雜誌 Griechisches Feuer auf den alten edlen Frauen は W. Müller, Stieglitz, Anselmi, Hohnhorst, Fouqué の詩又 Saphir の論文を登載した。これと雁行して寧ろこれより曩に一八二二年以來 Gleich, Halem, Ruder 等によりて刊行せられた雑誌 Der Freikampf der Griechen gegen die Türken, in seinem Entstehen und Fortgehen historisch-politisch dargestellt, sowie die Geschichte beider Nation は史的事實の研究に貢獻したと共にギリシヤ愛護主義の思想を感興したことが多<sup>⑮</sup>い。

註⑭ A. Stern, Bd. II, S. 478.

⑮ A. Heisenberg, Der Philhellenismus einst und jetzt, S. 15-17, S. 19-20.

C. Erler, S. 30.

⑯ „Von der Isar“—A. A. Ztg. 1821, Beilage, Nr. 116. (Erler, S. 30)

⑰ C. Erler, S. 30.

⑱ A. Heisenberg, S. 19-20.

⑲ A. Stern, Bd. II, S. 478.

- C. Erler, S. 59.
- ⑨ A. Heisenberg, S. 14-15.  
A. Stern, Bd. II. S. 479.
- ⑩ A. Heisenberg, S. 17.
- ⑪ C. Erler, S. 19, S. 20-22. S. 25.  
Krug, Letztes Wort über die Griechische Sache, 1822 II. (第三編)
- ⑫ C. Erler, S. 26.
- ⑬ C. Erler, S. 33-34. S. 36.
- ⑭ A. Heisenberg, S. 22.  
Karl Dietrich, Aus Briefen und Tagebüchern zum deutschen Philhellenismus, S. 17.
- ⑮ Stern, Bd. II. S. 480.  
A. Heisenberg, S. 24-25.  
W. Scherer, Geschichte der deutschen Literatur, S. 655.  
K. Dietrich, Aus Briefen, S. 4 Zur Einführung.
- ⑯ A. Heisenberg, S. 22.
- ⑰ A. Heisenberg, S. 23-24.
- ⑱ C. Erler, S. 28.

#### 四、ギリシヤ愛護主義の開展

ギリシヤ愛護主義の運動に對して幾多の反對がありしに拘らず、古典的人文主義者、クリスト教的

ドイツに於けるギリシヤ愛護主義の運動に就いて

浪漫主義者、政治的自由主義者が期せずして同一方面への開展の途を辿つて居る。日刊新聞定期刊行物に於てはギリシヤ問題が最も人心に感興を生せしめ、又これが日常生活の話題となり、これに對する賭事が流行し、流行界に於てはバリーにその端を發したる "à la Bobeline" (eine griechische Seeheldin) の服裝が淑女の間に行はれ、時計の紐にはギリシヤ色の青白のものが用ゐられた<sup>①</sup>。この運動は文人間に唱道せられしのみならず、更に政治的覺醒を促して居る。史家 Johann von Körner 1776-1848 が Die heilige Allianz und die Völker auf dem Kongress von Verna 1822 に熱烈なる語句を列ねし Verona 會議の議論を「嫌惡すべき詭辯哲學」と斷じ、「不幸なる國民(ギリシヤ國民)に對する兄弟の援助を拒否するものである」と叫び、史家 B. G. Niebuhr 1776-1831 が一八二二年四月二日 Karl, Freiherr von Stein 1757-1831 に與へたる書簡中に「小生は憎惡(對トル)と愛好(對ギリシヤ人)の何たるかを理解して居る。成程 Morea 半島のギリシヤ人は武装せる盜賊であるかも知れぬ。然し曾ては海乞食(Seegenen イスバニヤ)も海賊であつた、而もオランダは最高名譽の國家建設のことを彼等に感謝して居る<sup>②</sup>」といひ、ギリシヤ民族を以て盜賊視する非難に一矢報ゆるところあり、政治家としては Hessen の宰相 Heinrich, Freiherr von Gagern, 1799-1880 が一八二二年六月十九日に Darmstadt 市の下院に於ける演説に、「ギリシヤ人は道德上犯罪者でもない。彼等は國際法上のトルコの臣下でなくして實に奴隸である。幾多の高潔なるクリスト教の傳道師がここに横死して居る。ヨーロッパ諸國は自由戰役以來の獨立思想とギリ

シヤ文化とを擁護しこれを獨立せしめなくてはならぬ」と、蓋し政治家としての最初の叫びであらう。Preussen の政治家 Karl, Freiherr von Stein が一八二一年九月十七日 Heinrich, Freiherr von Gagern に與へたる書中に「ギリシヤの運命は憂ふべきものである。England が何等これに對して爲さざるは殺人罪を犯すものである」と。同じく彼が一八二二年十月六日 Spiegel 伯に與へたる書中に「ギリシヤ事件には神の援助がある」といひ、一八二二年十一月二十二日附の Capodistrias を激勵した書簡中にも「神との一致結合と勇氣と忍耐とに信頼せよ」といひ、クリスト教的浪漫主義者としての代表的地位を占めて居る。又彼は一八二六年二月二十七日 Gagern に對して「メッテルニヒの政策は狡猾跋行的野卑なるもの」と斷じて居る。

ギリシヤ愛護主義が實際運動として現はれたものはギリシヤ遠征隊の組織とギリシヤ援護の資金募集との二である。この二つの實際運動に當つたものは前後してドイツの重要都市に起つたギリシヤ擁護會である。ギリシヤ救援の遠征軍を組織することは、一八二一年以來 Thiersch 教授がこれを唱道し彼は軍の編成と組織とを立案して Bayern 王を動かさんとし又政治家の Gagern に Hessen の政府を動かして遠征軍組織を慫慂したことがあり、又 Ant. Günther や Fr. Jacobs へ送つた書簡にもこの計畫を明にして居る。Johann Heinrich Voss 1750-1826 (Heidelberg の教授、詩人古典學者) が公にした Die unfehlbar Bestimmung der Ottomanen 1821 に於てはトルコ人をヨーロッパより驅逐するに必要な詳細なる戰略

(むしろ空想)を示し注目を惹いて居る。哲人 Kruz は一八二一年八月に對トルコの十字軍組織の檄文を配布して居る。<sup>⑩</sup>

ヨーロッパに於てギリシヤ遠征軍に加つたものは、諸國の自由主義者故國の革命運動に失敗せるもの、又青年學生にしてこれに赴いたものも尠くなかつた。ドイツに於ては熱血男兒政治記者の Franz Lieber, 1800-1872, 將軍の Graf von Normann (K. F. Lebrecht) 1784-1822, Wilhelm von Scharnhorst 1786-1854 (General G. J. D. Michael Schinas 大尉, Wilhelm von Dittmar 大尉, 法學者の Karl Follen 1795-1844 等その重なるものである。これ等の遠征隊は一八二二年—一八二二年の間に前後十回ギリシヤに向つて輸送されて居る。八回は Marseille から二回は Livorno から出發して居る。遠征隊は素質が不良であつたが相當彼の地に於て奮戦したものである。Normann の率ゆる一隊の如きも Pera 附近の Napoli di Roma に於て惡戦し Normann も一八二二年十一月二十三日この地に於て戦死し、又 Dittmar は一八二六年の Missolonghi の陥落の際戦死して居る。<sup>⑪</sup>然しこれ等の遠征は結局失敗に終つて居る。

事實これ等の遠征隊の將士にして失望の極、歸國したものが多し。彼等の中には有爲なる人士が乏しく不平家や無頼の徒も相當に多く素質が一般に不良であつたこと、Marseille, Genna, Livorno 等の官憲が不親切であつてむしろこれを厄介視したること、ギリシヤ人も一般にこれ等の人士を歓迎せずし

て厄介者視する傾向があり、「不感謝と虐待」とを以てこれに報いたること、かの地に上陸後武器彈藥の缺乏せしこと等を遠征不成功の素因と観ることが出来る。この事實は遠征隊員にして失望して歸國せる人々の記事を以て證明することが出来る。<sup>⑧</sup>これ等の遠征が全然失敗のものであつたことは當時一八二二昨十二月二十七日 Preussen の内務大臣 Von Schuckmann 1755-1834 が内務省令を以て國民が騎虎の勢に驅られて異域に於ける無益の流血を禁止して居る事實を觀ても明かである。早く「プロシヤ政府は誤れる見解と十分に攻究せられざる動機によりて誤解せる人民をこれ以上窮地に陥らしむることなきために、官報を以て左の如きことを一般に知悉せしむる義務を有する。即ちプロシヤ國民が國民の義務に全然反してかの地に到り孤立無援に陥つた場合に本國に歸還せんとする者は、かの地の領事の保護を多く期待することが出来ない。これ彼等は彼等自身の義務に反し又性質上彼等の行爲が處罰せらるべきものであるからである」<sup>⑨</sup>と (Berlin, 27. Dec. 1822. der Minister des Innern und Polizei. von Schuckmann.) その他一八二三年に Baden 政府が國內のギリシヤ擁護會に解散を命じたことがあり、Nassau に於てはギリシヤ獨立の爲めの資金募集を禁止した例もあり、この運動が豫期の進展を見なかつたものである。

然るにギリシヤ愛護主義の運動を再燃せしめヨーロッパ人をして異常の興奮状態に立ち至らしめたものは實に Missolonghi (Mesolongion, Missolunghi) の陥落 (一八二六、IV、二二) であつた。當時 London Times が社説に於て「Missolonghi の陥落はギリシヤ獨立の期を促進せしめたものである。要塞は陥落

し大膽なる防禦者は殺戮せられアラビヤ軍<sup>(6)軍</sup> (Mahamed Ali) は Peloponnesus (= Morea) 半島に充滿するも、イギリスとロシアはこれを黙過せないだらう」と論じ、<sup>(5)</sup> ロンドンに於けるギリシヤ公債は昂騰して居る。ベルリンを中心として急激にギリシヤ擁護熱が起り、一八二六年四月二十五日には樞密顧問官にして侍醫の Hufeland、修道院長 Dr. Neander、官廷牧師 Dr. Strauss、宗務局評定官 Dr. Ritschl の名の下にベルリン各新聞にギリシヤ擁護の資金募集の計畫が發表せらるるに及び、内相 von Schuckmann は「暴風は既にあらゆる堤防を潰決した」と叫び、<sup>(6)</sup> 淑女は各家に就いて寄附金を求め、ソブラノの歌姫 Heiriette Sontag 1769-1848 の出演せる音楽會は巨額の資金を集め得た。

ここに注目すべきは一八二六年の Missolonghi 陥落を一轉換期としてフランス、スイス又ドイツ各地に於けるギリシヤ愛護主義の運動が遠征隊の派遣に非ずして軍資金救護金の募集運動となつたことである。<sup>(7)</sup> Missolonghi の陥落がギリシヤ擁護の熱情を昂めたことは當時 Stein が Gagern に與へたる書簡(一八二六、II、二七)、Caroline が Wilhelm von Humboldt に與へたる書<sup>(一八二六、IV、二四)</sup> Niebuhr が Dora Hensler に與へたる書簡(一八二六、V、二一)等によるも人心の動きを明かにすることが出来る。<sup>(8)</sup> ドイツに於けるかかる熱情は一八二六年十二月 Bayern 王の命によりてミュンヘンを出發せる Heidegger 中尉 (Karl Wilhelm Freiherr von Heideck 1787-1861) 一行のギリシヤ遠征隊の如き例もある。<sup>(9)</sup> 多くは各地に於ける擁護會の義捐金募集となつて現はれたのである。



このことはヨーロッパ諸國の一般風潮をなしたものである。スイス、フランスに於ても著名なる都市にはこの種の擁護會が建設せられ活動を續けたものである。スイスの Geneve 擁護會に於ては銀行家の Jean Gabriel Eynard 1775-1863 が中心となり資金軍需品兵糧をギリシヤ軍に輸送し、フランスドイツの擁護會と結合を圖り、又ギリシヤ假政府の要人 Miaouhis, Metaxas, Mauromichalis, Kolokotronis 等と連絡をとり、Ancona, Korfu, Zante, Cerigo, Nauplia 等に同志を遣しギリシヤ事件に關する正確な報告を諸國に送つて居り、ヨーロッパに於けるこの種の運動の中心をなして居つた。スイスの各都市は勿論、Paris, Marseille, Lyon, Nîmes, Stockholm, Edinburgh, Haag, Florenz にも同一の時代の脈搏があつた。<sup>②③</sup>

ベルリンの擁護會に於ては一八二六年中に國王 Friedrich Wilhelm III. が無名にして 1200 Friedrichsdors を寄贈し、Humoldt 兄弟、Brühl 伯夫人、Pappenland 伯夫人、Prinz Luis von Hessen 等の知名の人との寄附があり、その他市民學生の多數が資金を提供して居る。München に於ても國王、王族、銀行家の Fichtel, 美術家の Enzle 教師學生勞働者軍人婦人連、又新舊兩教の僧侶が何れも舉つてこの寄附行爲に應じて居る。ドイツの各地に於て殆ど各階級にわたつてこの種の喜捨行爲が現はれて居る。<sup>②④</sup>その他 Dresden, Bautzen, Kolditz, Annaberg, Freiburg, Dippoldswalde, Grossenhain, Frankenberg, Herrnhut, Darmstadt, Trier, Köln, Düsseldorf, Bonn, Elberfeld, Aachen, Hagen,

Barmen, Bochum, Gladbeck, Frankfurt a. M., Breslau, Hamburg, Stuttgart, Heidelberg の擁護會は最も活躍して居る。<sup>(28)</sup> これ等キリシヤ愛護主義の運動はヨーロッパ諸國中ドイツが最も熱烈を極め一八二二年一八二七年までの獻金總額フロン一百萬法以上と稱せられる。<sup>(29)</sup> (他の諸國は二百五十萬法と稱せらるる)。

- 註① A. Stern, Bd. II, S. 492.  
 ② A. Stern, Bd. II, S. 480.  
 ③ Niebuhr an Stein, den 20. April 1822.  
 (K. Dietrich, Aus Briefen und Tagebüchern zum deutschen Philhellenismus. S. 35).  
 ④ C. Epler, S. 38-39.  
 Heisenberg, S. 18.  
 ⑤ Stein an Gagern, den 17. Sep. 1821.  
 (K. Dietrich, S. 22-23).  
 ⑥ Stein an Graf Spiegel, den 6. Okt. 1822.  
 (K. Dietrich, S. 38).  
 ⑦ Stein an Capodistrias, den 22. Nov. 1822.  
 (K. Dietrich, S. 40).  
 ⑧ Stein an Gagern, den 27. Febr. 1826.  
 (K. Dietrich, S. 54).  
 ⑨ C. Epler, S. 38-39.  
 K. Dietrich, S. 19, S. 30-32.

- ㉚ C. Erler, S. 27.
- ㉛ A. Stern, Bd. II. S. 477-478.  
Erler, S. 44.
- ㉜ A. Stern, S. 479-481.
- ㉝ Franz Lieber, Tagebuch meines Aufenthalts in Griechenland im Jahre 1822. S. III.  
A. A. Ztg. 1823. Nr. II. (Leutenant von Jargow ㉞<sub>キ</sub> ㉞<sub>キ</sub>)  
Hande-und Spensersche Zeitung, (                    )  
Schaffhauser Zeitung, 1821. Nr. 336. (Leutenant Karass ㉞<sub>キ</sub> ㉞<sub>キ</sub>)  
(54 Erler, S. 47)
- ㉞ C. Erler, S. 48.
- ㉟ Neue Mainzer Zeitung, 1826. Nr. 145.  
(Erler, S. 50)
- ㊱ A. Stern. Bd. II. S. 491.  
L. Geiger. Berlin Bd. II. S. 545-546.
- ㊲ W. Büngel, S. 52 ff. Erler, S. 41 ff.
- ㊳ K. Dietrich, S. 54 ff.
- ㊴ Darstellung, aus der Bayerischen Kriegs- und Heeresgeschichte, Heft 6, 7.
- ㊵ A. Stern, Bd. II. S. 490-493.
- ㊶ A. Heisenberg, S. 18 ff.
- ㊷ C. Erler, S. 56 ff.

②② C. Eriar, S. 59-63.

②③ P. Osten, Bd. I. S. 63.

## 結 論

保守主義浪漫主義の高潮に達せる反動期に於て、そこに力強き自由主義人間主義 Humanismus の底流が在る。「當時 Hellenismus は重々しき嵐を衝みたる暗雲を以て蔽はれたヨーロッパの政治の空に七色の虹の如くに現はれた。實にギリシヤ愛護主義は三重の精神的生命の根源からその勢力を贏ち得て居る。三重の精神的生命とは、(一)古典的文献的新人文主義 der Klassisch-philologische Neumanismus (二)政治的自由主義 der politische Liberalismus (三)基督教的浪漫主義 die christliche Romanik といふのである。」

ギリシヤ文化への憧憬と民族主義の運動であり、即ち人間主義の運動と自由主義の運動とである。一八三〇年を一轉換期とする自由主義時代への先驅をなすものである。即ちギリシヤ獨立運動の成功が保守主義の機關、神聖同盟に對する一大打撃たるはいふまでもない。然るに當時ヨーロッパ諸國に起りたるギリシヤ愛護主義の運動は基督教的浪漫主義的要素を有して居る。これ會々異教徒に對する反感より發したるものあるにせよ、一八三〇年後に於ける文化の潮流たる自由主義新人文主義の開展に

對して浪漫主義が辨證法的位置にあることは否定出來ない。事實浪漫主義保守主義の潮流は一八五〇年 Omütz の協定を中心として復活して居る。詩人 Byron が一八二四年四月十九日僕麻質斯の爲めに Missolonghi に殞るゝや彼の思想<sup>ウヰェストユネムルツ</sup>厭世情調が一時一般の流行となつて居る。Goethe は彼の死を悼み彼を以て第十九世紀最大の天才<sup>②</sup> Das grösste Talent des Jährhunderts と激賞し、又ゲーテは Faust 第二編に於ける Helena 劇に於てギリシヤの美女 Helena と Faust とを結合せしめ、この間に Euphorion なる男子が出生して居る。この二者の戀愛結合こそ古代 Hellenismus 文化と中世基督教主義の文化との結合を象徴化したものである。而して近代文化の象徴として Euphorion を出生せしめて居る。Euphorion こそはバイロンを指したものである。Goethe の近代文化に對する史觀を視ふことが出来る。<sup>③</sup>

ギリシヤの獨立運動とギリシヤ愛護主義の運動とは、事實に於ては人間主義自由主義の勝利となり或意味に於ては自由主義新人文主義時代への史的開展に決定的解決を與へたものであるが、<sup>④</sup>この中に浪漫主義の要素を無視することが出来ない。この具體的現象としては美術界に於てこれを觀取することは至難ではない。このギリシヤ愛護主義の聲の高潮に達したる前後に於てこの風潮はフランスの美術界に最も早く響いて居る東方の影響を受けた所謂東方主義 Orientalismus が流行をなして居る。古典派の畫家で人間趣味の豊かな女性美に特色を示したかの Ingres 1780-1867 の「土耳其風呂の女」Femme turque au bain、「土耳其宮廷の女」Odalisque に肉體美の理想主義を表現し、浪漫派の Delacroix

1799-1865 が「シオの虐殺」Les Massacres de Chio 等のギリシヤものを題材としてヨーロッパ人のギリシヤ愛護主義の感興を昂め、又浪漫派の *Genie* 1791-1824 は一八一六年の *Méduse* 號の難破を題材として畫きたる「メデューズの筏」*La Radeau de la Méduse* も東方趣味の豊かなものといはれて居る。ギリシヤ愛護主義の美術界への影響はフランスに始まりドイツに及んで居る。

ドイツに於ては該方面に永くギリシヤ愛護主義の餘韻を留めて居る。而して *Bayern* はギリシヤ愛護主義の發祥地としてさすがに多くの餘韻をとどめて居る。バイエルンの首府ミュンヘンのテレジエン丘 (*Theresienhöhe*) 上に聳ゆる麒麟閣 (*Rühmeshalle*) は古典派の建築家 *Leo von Klenze* 1784-1864 の手に成りしもの、この古典建築を背景としてバイエルンを象徴せる「*Bavaria* の女神」の巨像が屹立して居る。これ實に巨匠彫像家 *Ludwig Schwanthaler* 1802-1848 の設計に基き *Navarino* 海戦に於て獲得せるトルコの大砲を材料として鑄造せるもの(一八五〇)、輕快にして俊敏、しかも自由奔放の奇才を示して居る。<sup>⑥</sup>ミュンヘン市のケーニヒ廣場に裝飾門 *Prachtthor* がある、所謂 *Propyläen* である。これ *Klenze* の設計により一八四六年から起工し一八六二年に完成せるもの、内部はイオニヤ式圓柱を、外部にはドーリヤ式圓柱を用ひた古典主義藝術の逸品である。而してこれが破風の三角面部にある浮彫はギリシヤ獨立戦争及びギリシヤ新王 *Otto I.* 1833-1862 の事業を描寫せるものであつて *Schwantaler* の手に成りしものである。更に王宮の庭園の鬱蒼たる綠樹の間に隱見する拱廊に、バイエル

ンの宮廷畫家 Peter Hess 1792-1871 のギリシヤ獨立の戰爭畫と風景畫家 Karl Rottmann 1798-1850 のギリシヤ風景畫を以て壁畫となし異彩を放つて居る。前者は曾ては自由戰役に従事して戰爭畫を得意とし、後者はミュンヘンの繪畫館ピナコテークに幾多の傑作を残して居る、この壁畫は一八二七年より一八三四年の間に畫かれたものであつてギリシヤの名譽と自由とを祝福したものである。是等の幾多の美術品は何れもバイエルンの美術生命の創造者にして自ら „Ich, ich, der König, bin die Kunst von München.“ と稱したる國王 Ludwig I. 1825-1848 の力によりて建設せられたことは勿論である。これ實に Hellenismus の表現であり、自由主義新人主義の史的開展を物語るものである。①

ギリシヤ愛護主義の勝利は最早確定的のものとなつた。即ち政治上に於ては、イギリスとロシアはオーストリアと斷ちトルコ艦隊を撃破しギリシヤは遂に獨立するに至つた。新しきギリシヤが新しき國王としてバイエルン王 Ludwig I. の第二子 Otto von Bayern を迎ふるに至つたことは偶然の結果ではない。ギリシヤ愛護主義の結果として最も自然的なる開展である。新王は異常なる民衆の熱誠を以てバイエルンの首都ミュンヘンを出發し、絶大なる感激を以てギリシヤの首府アテネに迎へられた。ギリシヤ獨立戰役がクリスト教的浪漫主義者の相當の援助をうけたるものもあるも、その本質に於ては民族主義、自由主義の勝利を意味する七月革命と共に、ギリシヤ愛護主義の運動が一八三〇年を轉換期とする自由主義新人文主義の新しき時代への史的開展に重要な役目を演じて居るものである。

- 註① Karl Dieterich, Aus Briefen und Tagebüchern zum Deutschen Philhellenismus. Zur Einführung.  
② Eckermann, Gespräch mit Goethe.  
③ A. Trendelenburg, Faust II. S. 415-417 の註  
櫻井政隆譯「フマヌム」八九五頁—八九七頁の註句  
W. Scherer, Geschichte der deutschen Literatur. S. 714 ff.  
山岸光吉著「歐洲文學概論」二〇二頁—二二二頁  
④ L. Riess, Neuzeitliche Kulturwicklung. S. 197 f.  
⑤ A. Heisenberg, S. 26 ff.  
⑥ Springer, Kunstgeschichte, Bd. V. S. 42.  
⑦ Heisenberg, S. 26-27.  
⑧ R. Arnold, Der deutsche Philhellenismus. S. 56-57.  
C. Erler, S. 154-155.

(完)